

イオム

ANARKISMO K. LITERATURO 1033

ENH AVO

〈イオム雑記〉…………… 1
雑感—大杉虐殺五十年—/河本乾次
ヨーロッパの旅(1)/平山房子

西欧アナキスト見聞五十五日

前田 幸長 5

〈詩〉風景 山口 英 30

〈書評〉

大正アナキズムの問いかけるもの

—労運復刻版— 戸田 広介 33

江西—三とその時代 (上)

向井 孝 37

N-ro. **3**

NOV. 1973

イオム3号 1973・11 ¥100

発行 イオムの会
神戸市葺合区上筒井通8丁目22の6 前田 幸長
印刷 イカロス工房

雑感 大杉虐殺五十年

河本乾次

〃古井戸の三個の怪やからす啼く〃 大杉栄の虐殺の状況を偲びて、信濃太郎の詠んだ句である。

大正十二年九月一日、関東大震災直後の混乱のとき、大杉は突如、行方不明となった。まもなく、憲兵隊本部の古井戸から三個の怪死体が発見された。これが大杉栄、伊藤野枝、の橋宗一少年と確認され、憲兵大尉甘粕正彦の手で虐殺されたことが判明した。そのむごたらしい殺し方は、軍国主義、権力主義の白色テロの残忍性をきわめ、目をおおわせるものであった。

そのときから痛恨の星霜は流れて、早や、五十年となり、九月がくると大杉の面影を追想される。

大杉に關しては、すでに追想、論評、著作の全集など、多くの出版物が出されているが、最近の旺巻は、大島英三郎さんの御尽力によって「労働運動」紙の合冊復刻版が、犠牲的謙価で出版されたことである。これは日本の社会運動史の中で逸することのできなない資料なれば、運動立場を異にする者も、是非、座右銘に、各労働団体に

も一冊は備えられたくお薦めするものである。

大杉のことは語りつくされていることなので、ここではこぼれ話の一つを捨ててみよう。

大杉は、当時においてたしかに形破りの男であった。演説会に、トルコ帽子を被ったまゝ演壇に登り、愛用のマドロスパイプでタバコをぶかぶか吹かしながら聴衆に喋り出すふるまいは、彼でなければやれない演技であった。こういう態度は、一面傍若無人にみえるが、従来の演者と聴衆のしかめつらしいカキを破って、自由発意と自由合意の話し合いのできる場をつくるためであった。そういう理想と目的をもった行動であったのである。

また、大杉の性格は激しい短気の一面もあって、心でない御世辞は言えず、憎らしいほど悪口をたたく男はない。大杉は何んの事件で入獄したときか、今、想ひ出せないが、大正九年の四月頃、神田・松本亭で〃大杉出獄歓迎会〃が催されたときの話である。服部浜次が開会の挨拶を述べ、その後、岩佐太郎が得意のよどみのない弁舌で人を感動さす話をしているとき、大杉は魔子を抱いて姿を現わした。まもなく、岩佐老の話は終って、荒畑寒村が立った。当時、山川均と共訳中のウエップの「英国労働組合史」の一節を紹介した。英国の労働運動も、荒畑の口を通ると、その熱弁によってサンヂカリズムの

直接行動論に愛るところに荒畑の人氣があつた。ここに集つてゐる労働者を感じさせた。荒畑の話が終ると、大杉は直ぐ立ち上つて、「今、荒畑がむつかしい話をして賢そうにみえる。自分の知らないことを人が話すと、その人が自分より賢く偉い人に見えるものである。荒畑は諸君より少し英語ができる。それで外国の書物を読んで諸君の知らないことを知っているわけである。諸君は、毎日労働に追われて英語を学ぶ時間がなかつた。荒畑と諸君とはただそれだけの相違で、何も寒畑が賢くも、偉くもないのである」と、それから獄中のこと、出獄後の感想を語つた。

これを聴いていて、自分の出獄歓迎会に出席してくれている荒畑を、こんなに皮肉らなくとも荒畑に同情するほど、大杉には、そんな配慮はみじんもなく、感じたまま痛烈な批判をなす、実に、天性的な悪口家であつた。この調子で、賀川豊彦、鈴木文治、米田庄太郎など、当時の有名人をまた、堺利彦までも無で斬りにした。

これは、大杉の知識階級への虚像を徹底的に粉砕し、労働者に押しつけようとする指導を排撃して、労働者の自主性、創造性を引き出そうとした理想からであつた。この知識階級排撃論者の大杉が、また、皮肉にも、アナキスト労働者から、大杉も、所註、知識階級で労働者

の眞の心はわからな^うと、造反分子によつて『労働者』『関西労働者』の発刊を生んだことは、周知のことである。ここで、別に『労働者』の発刊事情を語ろうとするのではない。『関西労働者』の名を引き合ひに出したので、これに関連した一つの余話に移ることにする。

それは、大原社会問題研究所の蔵書の中に、幸徳秋水の『平民主義』の一冊に、小田知一^の蔵書印のある本がある。この本の前の所有者であつた小田知一という人物は、『関西労働者』グループの一員であつた。

小山仁示編集の『大阪地方労働運動史研究』（第三号一九五九・十二・一発行）に、小山弘健の「『関西労働者』その他について」の一文が載つてゐる。この中に、「『関西労働者』グループの一員であつた対島密行からの書簡の一節に、（『小田知一』というのも、京都で医家の車夫をしており、ベルグソン哲学などかじり、なかなか変つた男でした」と、短文ながら、小田知一の人物像の片鱗を記してゐることは、現今では、これ以上に小田知一に關して経歴を知ることとはできないのである。

東京での『労働者』の発刊は、社会主義同盟創立前後に、大杉への批判、造反分子によつて出され、『関西労働者』も、その系統を引くとされているが、関西での実状は、必ずしも大杉への造反分子で出されたとは言えな

い点がある。当時の対島密行も小田知一も、その他の者も、思想的に大杉への批判を持つていたかは疑問である。ただ、当時、吉田一が東京から来阪して『関西労働者』の発刊の話を持ちこみ、印刷も東京で刷つたことは事実で、その意味では、『関西労働者』は『労働者』の関西版と言るのであるが、『関西労働者』グループの顔ぶれと、その内容を見ると、むしろ、大杉の『労働運動』の関西版としての役割の半面を持ったようである。こういう問題は、今日の非常時代の時点において、特に、論じなければならぬ問題ではないのであるが、小田知一という無名の社会運動者の蔵書印のある本が、大原社会問題研究所の書庫に有ることは、埋もれた泡沫に消えんとする小田知一のせめての記念碑を、いつまでも同志愛の心に刻みつけておきたいからである。

ヨーロッパの旅 ①

平山房子

夏の期間の約三ヶ月をヨーロッパで暮した。その殆んどの時間を同志との交流に努め、ずい分多くの人々に会つた。今回の旅行は、二年前から予定し、いつもこの旅行を念頭において私の日常生活があつたといつてよい。しかし出発の日が近づいても私の気持はあまりはずまない様であつた。計画的であつたにもかからず自分の勉強不足が目についた。それにもまして私の興味をそいだのは、ヨーロッパでの同志間にある中傷、反目の感にもつかない争い（それは昨日今日に始まつたことではないが、）の中に自分自身の意志とは関係なくまき込まれることの馬鹿らしさであつた。その様な行為は、インタナショナル運動をはむ以外のなものでもないとは私は考へてゐるだけに、彼等の心の狭さに少々うんざりもしてゐた。

けれども今度の旅行の私個人の目的は、シンシリー島のフランコ・レジョに会うことであつた。一九七〇年の渡欧の際、フランコは私と会う為にトリノ迄出向いて来てくれた。我々はそこで出会つた、ほんの短かい時間であつたが彼がその時私にあたえた印象は強烈であつた。『まさに騎士』と私は確信し、彼の人物にはれ込んだ。それ以来、イタリーの南端シシリーを訪ね、彼のその地での運動ぶりを実際に見てみたいという事が私の執念に

なった。私は彼にシシリー行きを書いた。二度、三度、両者の計画を打合せ手紙のやりとりの後、最終的には、彼が七月二十二日私の出席するパリの南西約二〇〇Kのシャトー・ジュ・ロワールでのA・O・Aの会議場まで出向いて来るようになった。そこから一緒にシシリーのラグーサまで行こうというのである。シシリーからシャトー・ジュ・ロワールまでの長い道中を想像して私は感謝すると共にフランコと連立つてのイタリー旅行のたのしみが私の心を再びヨーロッパへと励まし、かり立てた。

六月十七日、夜の九時十五分、延着の飛行機から降りた私を笑顔と抱擁で迎えたのは、A・O・A（アナキスト労働者同盟）のボーラトン夫妻であった。それは二年数ヶ月前、私が始めてこのパリ・オルリー空港に降りた時と同じ光景だった。夫妻はこの春、パリを去って、そこから南西二五〇km、シュニウという人口七〇〇人の小さな村の住民になっていた。私はこの村で彼等夫妻と共に一ヶ月近くをすごした。教会と村役場を中心に、よりそう様に軒を並べるシュニウの村、フランスならどの地方にも見られるありふれた静かで物憂げな村であった。長い眠りからさめないままこの世から置き忘れられたかのように見えたこの村の平和も、私の滞在中に最近この近

くに建設された二つの工場からの排出物でシュニウの村は汚染され始めたという小さな新聞記事を見出すに至って「ここでもか」と歎息が出たものだ。村の住民達は長年住みなれた人々が多かったが、中にはボーラトン夫妻の様に年金生活で余生を静かな田舎で送ろうとする人達もあつた。彼等は退職金で土地と古い家を手に入れ、百姓のまね事をし乍ら年金で食べている。ボーラトン夫妻を例にとるなら、夫のレイモンは今年五十一才、二十五年間を国鉄職員として働いた。妻のマドレーヌは五十才、パリのメトロに二十八年勤めた。現在レイモン七〇〇フラン、マドレーヌ九〇〇フランが毎月彼等の受取る年金の額である。この年金は一九五八年以降諸物価の値上りを考慮して毎年三%増額支給されるといふ。現在、フランス労働者の退職年金は、鉄道五〇〇五五才、坑夫五五才、公務員六〇才、個人企業六五〇七〇才となっている。

ボーラトン夫妻は約五〇〇平方mの土地をもった家を買ひ、二台の車を所有して、野菜作りをし乍ら今やゆうゆう自適の生活である。もつとも五十才という男盛りの若さで片田舎に引込んでしまい、パリで働いていた二年前に比べるとずっと老けこんで魅力を失った様に見えるが、そんなことはともかく、当人が望むなら、フランス

では、労働者にこの様な生活が許されるという現実に、フランス労働運動の闘いのあとを見る思いだった。

シュニウの村での生活の間に私は今後の旅のプランにそつてホテルの予約をしたり、知人を訪ねての小旅行をしたり忙しかつた。テレビは連日ドルの暴落を告げ、私と顔を合わせた友人達は必ず『ドルが下がって旅行も大変です』と気づかってくれた。シャトー・デュ・ロワールでの会議の日が近づくにつれ受入れ側としてレイモンは多忙になった。ホテルに泊る同志のための予約、そ

してホテルに泊ることが出来ないものためには、母親と二人暮らしでかなり広い家に住んでいる同志ジョルジュの家が提供されることになり、レイモンの家の納屋でねむっていた古いマット等が次々車でジョルジュの家へ運びこまれた。

そして私はフランコを迎えるために、シャトー・デュ・ロワールの町のホテルに引き移った。いよいよ会議の日には近づき参加者がこの町に姿を見せ始めた。

(つづく)

西欧アナキスト見聞五十五日

前田幸長

二年前、フランスのA O A（アナキスト労働者同盟）のレイモン・ボーラトンからアナキストの国際集会を開きたいが、出席しないかといつてきた。彼はほくの姉平山房子の十余年来の友人で、三年前平山が渡欧したとき、ボーラトン夫妻との友情を更に深いものとした。彼は、『われわれの集会はアナキストの世界連帯を真に期待するものたちの集まる場としたい。われわれの集会は何々

代表の集まる場でない、同志的信頼と友情のもとに肌に触れ合う話し合いをしたい』といつてきた。ほくは、彼のそういう意見に同調することができた。しかし、A O Aは常々F A F（フランス・アナキスト連盟）を目の敵とし、A O Aの機関紙アナシー上でF A Fの悪口（批判とは思えない）をいつていた。六八年のカララ国際会議を罵倒していた。だから、A O Aのいう集会とはどんな